

Title	放射線被曝後の異常リンパ球の出現及びその意義について
Author(s)	田中, 敬正; 黒田, 康正; 橋本, 隆治
Citation	日本医学放射線学会雑誌. 1967, 27(4), p. 429-436
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/19491
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

特別掲載

放射線被曝後の異常リンパ球の出現及び その意義について

天理病院放射線科

田中敬正 黒田康正
京都大学医学部放射線医学教室 (主任 福田正教授)

橋本隆治

(昭和42年 5月20日受付)

The Occurrence and Significance of an Anomalous Lymphocyte in Peripheral
Blood after Radiation Exposures

by

Yoshimasa Tanaka and Yasumasa Kuroda

Department of Radiology, Tenri Hospital

Takaji Hashimoto

Department of Radiology, Faculty of Medicine, Kyoto University, Kyoto, Japan

(Director: Prof. M. Fukuda)

Cytoplasmic Inclusions and Binucleate Lymphocytes in peripheral blood of d-d N mice which have received whole body irradiation and patients treated with ^{60}Co were examined.

Experimental results were as follows:

1) Cytoplasmic Inclusions were not found in over 10,000 normal mouse and human lymphocytes examined.

2) After whole body exposure using mice from 50R to 400R, Cytoplasmic Inclusions reached to maximum value 10-14 days after exposure and then decreased to 0 at 50-70 days after irradiation. These Cytoplasmic Inclusions seems to be the changes occurred in the precursors of lymphocytes.

3) In the case of reticulosarcomatosis irradiated both side of neck region and upper mediastinum, Cytoplasmic Inclusions increased with the radiation dose and continued to increase after the end of irradiation about 100 days or more.

4) In several patients with malignant lymphomas, seminoma and lung cancer etc. during or after treatment with ^{60}Co , Cytoplasmic Inclusions were found in the frequencies from 0.58 to 1.96 and had higher incidence approximately as the volume dosis increased.

However, Cytoplasmic Inclusions and Binucleate lymphocytes were not found in the case of post-operative breast cancer.

5) Cytoplasmic Inclusions were Feulgen positive, and it seem to be nuclear fragments.

6) In a daily study of the peripheral blood of X-irradiated mice, Cytoplasmic Granules were found from 4 to 24 hours after irradiation and disappeared soon. It suggests that these Cytoplasmic Granules

seem to be the change occurred in the peripheral lymphocyte.

7) The Binucleated Lymphocyte was found in unirradiated d-d mice to the extent of about 1.2% of all lymphocytes and did not increased regularly with the irradiated dose.

8) The fact that Cytoplasmic Inclusions were found in normal human blood and normal mice suggests that their presence may be able to diagnose a prior exposure to ionizing radiations.

1. 緒 言

造血系組織は、非常に放射線感受性が高く末梢血液像、骨髓像は、放射線障害の有効な1つの指標となつている。しかしごく微量放射線を受けた時の造血系の変化を検査することは非常に困難であるが、最大許容線量域の照射を受けた場合に、二核リンパ球 (binucleate Lymphocyte: Lymphocytes with bilobed Nuclei) が出現することが Ingram 等¹⁾⁹⁾¹⁰⁾により提唱され、放射線障害の一つの指標となるといつている。しかし、之等のものは、マウスでは正常末梢血に見られることが示され²⁾³⁾、300R全身照射を受けてもその出現率があまり変わらないことがいわれている。

一方 R. Rugh²⁾によれば、マウス全身照射又は抗癌剤投与により、末梢リンパ球の細胞質内に封入体が生じ、之を large cytoplasmic inclusions (nuclear satellites or fragments) と呼んだ。そして之等の封入体は正常の脊椎動物には現われず、放射線照射の一つの指標になると考えられる。我々は之等の細胞内封入体、及び2核リンパ球の出現率を d-d 系マウス及び放射線治療患者について調べ、之と照射線量、照射部位、又は出現の時間的關係について検討を加え、放射線障害の1つの指標になり得るや否やについて調べた。又之等の細胞内封入体の出現のメカニズムについても考察を加えた。

2. 研究方法

使用動物としては雄 d-d 系マウス (生後8週) 体重28—35g であつた。照射前及び照射後種々の時間で尾静脈より採血後塗抹標本作製シグムザ複染色を行い観察した。

照射条件としては、200kVp X線、0.5mmCu のフィルターを使用し、20mA、半価層は 0.5mm Cu を用いた。線量率は 40R/min。焦点動物間距離は60cmであつた。

放射線治療患者、例えばホジキン氏病、セミンーム、リンパ肉腫症、術後乳癌、肺癌等の患者の場合にも同様に細胞内封入体及び2核リンパ球の出現率を調べた。

細胞内封入体は、Fig. 3, 4.に見る如く、核外の細胞質内にヘマトキシリンに濃染する小さい被片状のものをもつたリンパ球を指す。この場合Fig. 5, 6に見る様な数コの小さい顆粒状のものは、Cytoplasmic Granules (細胞内顆粒) と命名して、前者と区別した。即ち算定の際に細胞内封入体の中にはこの Cytoplasmic Granules は含めていない。

2核リンパ球というのは、普通の小リンパ球よりは大きく、2つの核を有していることを除いて成熟リンパ球としての形態上の標準を具えているものである。2つの核は、細いクロマチンで結ばれるか、完全に分離しているもので、核が部分的に割れているもの、太い橋で結ばれ砂時計状をなすものは、之には含まれてない。

3. 実験結果

1) 細胞内封入体 (Cytoplasmic Inclusions, 以後 C.I. と省略)

a) マウスの場合

マウスに 400R 全身照射後経時的に C.I. を調べると Fig. 1 の如くなる。照射後4日迄は末梢血液中には殆んど出現しないが (Fig. 2) それ以

Fig. 1 Days after Whole Body Irradiation

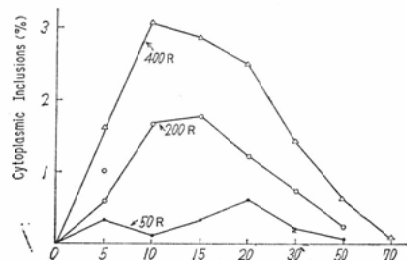
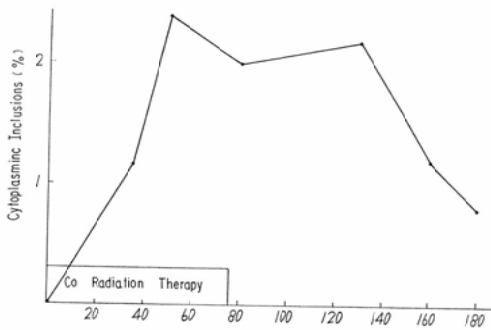


Table 1. The percentage of Binucleate L. and Cytoplasmic I. from patients treated with ^{60}Co for malignant disease.

Name	Name of Diseases	Irradiation Dose	Total Lymphocytes	Binucleate L. (%)	Cytoplasmic I. (%)
Y. S.	Reticulosarcoma	Both Neck Region: 4600 R	1,800	0.224	1.12
S. K.	Seminoma	Upper Abdomen: 3350R Lower Abdomen: 810R	2,105	0.87	0.58
N. J.	Reticulosarcoma	Both Neck Axilla: 4500R Upper Breast: 4000R	1,350	0.15	4.16
T. M.	Mediast. Tumor	R. Chest: 616R	1,512	0.15	1.40
A. M.	Reticulosar.	Both Neck Region: 4500R	1,603	0.13	1.96
T. Y.	Breast Cancer	R. Supraclav. & R. Breast: 4000R	1,800	0.00	0.00

Fig. 7. Days after Initiation of Radiation Therapy.



球には異常リンパ球は見られなかったが、セミノーム、細網肉腫症、縦隔洞腫瘍には0.58~4.16%のC.I.の出現を見た。

之等の間には、照射容積線量がませば大体に於てC.I.の増加が見られたが、リンパ組織の多い部に照射した時には多く出現する様に思はれる。

放射線治療中及び治療後のC.I.の推移を細網

Fig. 8

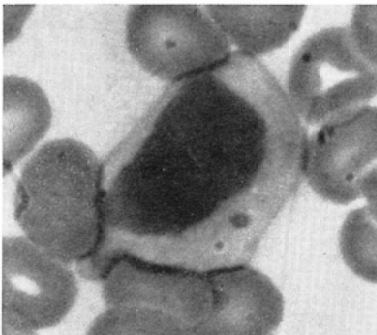


Fig. 9

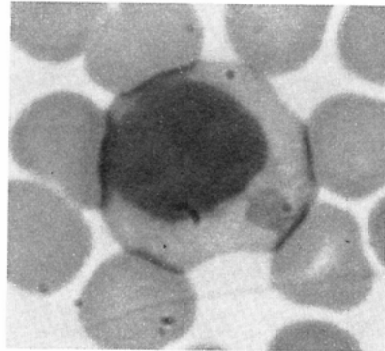


Fig. 10

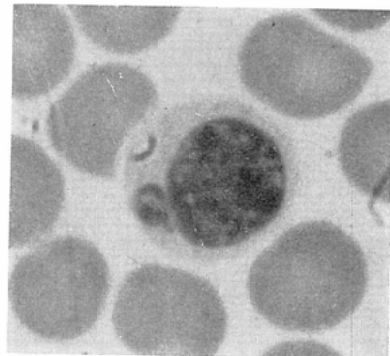


Fig. 8,9 and 10. Lymphocytes from patient with Reticulosarcomatosis showing Cytoplasmic Inclusions.

Fig. 8: total dose 3200R.

Fig. 9: total dose 1000 R.

Fig. 10: total dose 2500R.

Fig. 11 Patient with seminoma and no previous radiation therapy following 1000R ⁶⁰Co irradiation showing lymphocytes with Cytoplasmic Inclusions.



Fig. 12. Lymphocytes from patient with mediastinal tumor given a total dose of 2000R to mid-thorax showing formation Cytoplasmic Inclusions.

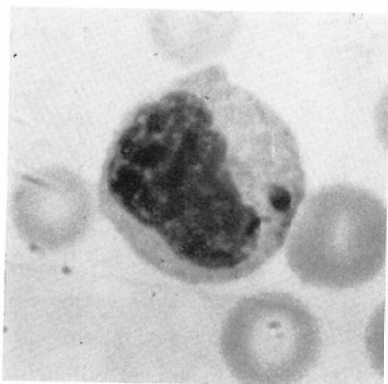


Fig. 13. Lymphocyte wit Cytoplasmic Inclusion stained with Feulgen Reaction.



Fig. 14. Days after Whole Body Irradiation

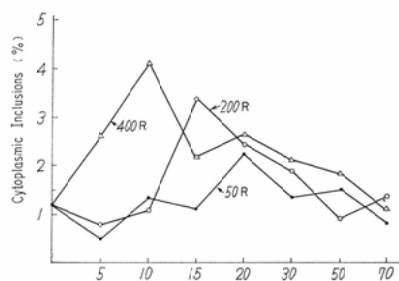


Fig. 15. Lymphocytes with Binucleate Lymphocyte within the cytoplasm in the mouse 10 days after 400R whole body exposure.

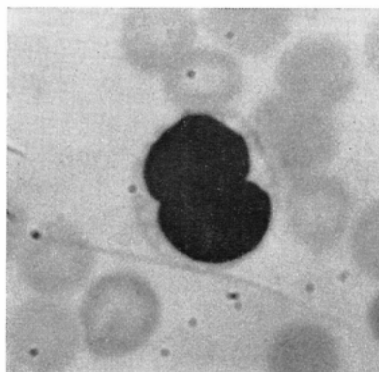
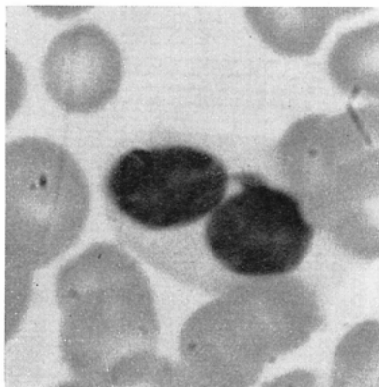


Fig. 16. Lymphocytes from patient with ⁶⁰Co for mediastinal tumor. This sample was taken after exposure to accumulated 1200R in 15 days.



肉腫症について調べたのが Fig. 7 である。図に見る如く、C.I. は照射期間中徐々に増加し照射40～50日後に最大に達し、照射終了後にも減少せず、照射終了後60日位より徐々に減少し初め、照射終了後100日を経てもなお0.5%以上存在することがわかった。

細網肉腫症に見られた C.I. を Fig. 8,9,10に、セミノームは Fig.11に、縦隔洞腫瘍は、Fig.12に示す。

かかる核封入体はフォイルゲン反応陽性であり、nuclear Fragments であると思われる。(Fig. 13)

2) 2核リンパ球 (Binucleate Lymphocyte; 以下 B.L. に略)

d-d 系マウスを用いた場合、照射後 B.L. の時間的推移は Fig.14の如くなる。即ち非照射の場合にも1.3%の B.L. を得た。50, 200, 400 R 照射後1～2週間で増加し、後減少していくが増減の傾向は、C.I.の方がより規則正しく、はつきりしていることがわかる。

B.L. の像を Fig.15 (マウス) Fig.16 (縦隔洞腫瘍の患者) に示す。

3. 考 察

末梢リンパ球は、生殖細胞等と共に最も放射線感受性の高いものであり、全身照射線量に比例してリンパ球減少が起る¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾¹⁸⁾。

全身照射25Rでも著明な減少を来し、減少の割合及び回復の程度は、照射線量に比例し、照射後24時間位で一般に最小となる¹²⁾。

末梢血のリンパ球は6～24時間生存するといわれているが¹⁹⁾、リンパ球の急激に減少するのは次の2つの原因があると考えられる。即ち(1)リンパ球の Precursor の減少である。この場合細胞は数回の分裂の後に死ぬか (Mitotic death 又は Delayed death) 或いは直ちに死ぬ (Interphase death) 場合の2つがあり、後者では骨髄やリンパ節で見られる様に Pyknosis, Karyolysis, intranuclear a, cytoplasmic vascularization, Lobulation, Fragmentation 等を起し直ちに死んだあと非常に急速に除去され照射後1日以上もとどまる

ということは少い。

しかし前者の Mitotic Death の場合は、T.M. Fliedner もいつている如く、Interphase Death に比べ比較的永らくとどまる。

2) 末梢リンパ球の減少する第2の場合としては、末梢リンパ球自身の直接の破壊によるものと考えられる。我々の場合、照射後4～24時間で出現し、その後速かに消失する Cytoplasmic Granules (Fig. 5,6)は末梢リンパ球におこつたもので Karyorrhexis の早期のあらはれであると思われる。

C.I. は我々の実験から見ると Fig. 1,2. に見る如く照射直後2, 3日迄は殆んど出現せず、10～14日位で最大の出現を見ている。Rugh²³⁾ も全身照射後約2週でかかる異常リンパ球が最も多く出現したといつている。C.I.は Cytoplasmic Granules とは異り、リンパ球の Precursors. 即ち Pro¹ lymphocyte 或いは Lymphoblast stage, 或いは之等の分化しつつある時、核におこつたもので、染色体における変化、切断がそのまま死滅せずに末梢血に出現したものと考えられ、之に10～14日間を要するものと想像される。上述した2つの死の様式の如く強度の変化を起したものでなくて核内に染色体の遊離した debris として残り分裂に際して死なず残つたものと思はれる。Fliedner 等¹⁸⁾ は全身照射後の人体の骨髄の細胞の中に分裂に関連した異常 (Mitotically connected abnormalities) を示すものとして、染色体橋、internuclear bridge 等と共に incomplete nuclear Division を述べているが、之は C.I. と関連があるものと考えられる。

又 C.I. はフォイルゲン反応陽性であることから、nuclear Fragment であることがわかる。之等の異常リンパ球は、いわば死にかかつた細胞であつて、培養することは出来ないと Rugh²⁾ もいつている。

細網肉腫症の場合にも、放射線治療終了後100日以上も C.I. が末梢血中に出現することからも、Precursors に起つた変化であることを暗示している。

Lockport の原子炉事故の時には⁴⁾人体に 300R

全身照射(頭や肩には1500R)をうけ、C.I.は0.4%の出現を見ている。その他放射線事故で人体の末梢血にC.I.が現われたという報告がある⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾。

Fig. 1で見る如く照射線量の増加につれて増加するが、C.I.が全身照射によって出現する最小の線量としては約10R位ではないかと思われる。

C.I.をおこす原因としては、放射線の外に radiomimetic な物質でも起ると考えねばならない。我々の症例ではすべて抗癌剤を使用していないが、Rughによると Nitrogen mustard 等によりやはり C.I. を来すといっている。もし放射線と radiomimetic substance の作用機序が異り作用する Precursors が違えば末梢に生ずる C.I. の出現する模様も違って来る筈で、今後かかる面での追求が興味深いと思われる。

物理的なストレス例えば3カ月間低体温で(10°C)飼育する等では、マウスのリンパ球にC.I.を生じなかつたといっている²⁾。

種々の疾患について放射線治療を行った際に、C.I., B.L.を見たのが Table 1. である。大体に於て容積線量が多い程増加する傾向にある。しかし術後乳癌の場合には C.I., B.L. 共に 0 であつた。之より B.L. C.I. の出現にはリンパ組織の照射が、容積線量のみでなく之等の出現に大きな関係があると考えられる。

2核リンパ球は Ingram 等¹⁾⁹⁾¹⁰⁾により、ごく微量の放射線(5R以下)でも2核リンパ球の増加を来すことを述べている。しかし、d-d 系マウスの場合、2核リンパ球は非照射の場合でも約1.2%前後出現し、Fig. 14で見る如く50, 200, 400R照射により、照射後5, ~30日位で対照値よりも増加を見るが、C.I. で見る如く増加の程度が量的に判然としない。之等のことより少くとも、d-d 系マウスで2核リンパ球が、放射線障害の1つの指標になるかどうかは疑わしいと考えられる。それにひきかへ、C.I.は、正常動物、人体に見られず、照射線量に比例して出現することから、C.I.が見られた場合、以前に照射をうけたという有力な診断になると思われる。

4. 結 語

d-d 系マウスに全身照射を行い、又放射線治療患者の末梢血をギムザ複染色により、リンパ球の中で細胞内封入体(Cytoplasmic Inclusions: C.I.)及び2核リンパ球(Binucleate Lymphocytes: B.L.)の出現率を調べて次の如き結果を得た。

1) C.I.は非照射マウス、及び非照射患者共に見られなかつた。

2) マウス全身一時照射50, 200, 400Rを行った場合、照射後10~14日で最高に達し、その後徐々に減少し、50~70日後0になる。C.I.はリンパ球の Precursors におこつた変化と考えられる。

3) 悪性リンパ腫、ゼミノーム等では照射中又は照射終了時に約0.5~4%のC.I.を見たが大体に於て容積線量が多い程増加する傾向がある。しかし術後乳癌の場合にはC.I., B.L. 共に0であつた。

4) 細網肉腫症で両頸部及び上胸部に放射線治療を行った場合、C.I.は照射開始と共に増加し照射終了後も約100日間の出現を見ている。

5) C.I.はフォイルゲン陽性である。

6) Cytoplasmic Granules は照射後早く出現し(4~24時間)後急速に消失する。末梢リンパ球におこつた変化と考えられる。

7) B.L. は非照射マウスには約1.2%位見られた。そして線量増加につれての増加傾向はあまり著明でなかつた。

8) 以上より、C.I.は放射線障害の一つの有力な指標になると考えられる。

文 献

- 1) Ingram, M.: The occurrence and significance of binucleate lymphocytes in peripheral blood after small radiation exposures: Immediate and Low Level Effects of Ionizing Radiation. Edited by A.A. Buzzeti-Traverso. Taylor & Francis, London, 1960, 233-245.
- 2) Rugh, R.: An anomalous lymphocytes: Possibly diagnostic for exposure to ionizing radiations or radiomimetic agents. Am. J. Roent. 91 (1964), 192-201.
- 3) Rugh, R., and Pardo, G.: Age and hematological recovery from whole body X-irradiation. Rad. Res. 1963.
- 4) Ingram, M., and Howland, J.W.: Some mor-

- phorological peculiarities of blood cells in man following accidental X-irradiation, *Rad. Res.* 16 (1962), 585.
- 5) Hempelmann, L.H., Lisco, H., and Hoffman, J.G.: Acute radiation syndrome: Study of nine cases and review of problem. *Ann. Int. Med.* 36 (1952), 279—510.
 - 6) Rossi, E.C., Thorngate, A.A., and Larson, F.C.: Acute radiation syndrome caused by accidental exposure to ^{60}Co . *J. Lab. & Clin. Med.* 59 (1962), 655—666.
 - 7) Shiels, D.O.: Some effects of radiation on lymphoid cells. *M.J. Australia.* 2 (1954), 583—586.
 - 8) Shiels, D.O.: Certain structural aspects of lymphocytes and monocytes in relation to clinical condition of persons exposed to ionizing radiations. *Brit. J. Radiol.* 32 (1959), 306—314.
 - 9) Dobson, R.L., and Chupp, M.M.: Effect of small measured doses of radiation on lymphocyte morphology in man. *Pro. Soc. Exper. Biol. & Med.* 95 (1957), 360—361.
 - 10) Dobson, R.L.: Binucleated lymphocytes and low level effects of ionizing radions: Edited by A.A. Buzzeti-Traverso. Taylor & Francis, London: (1960), 247—251.
 - 11) Ingram, M., and Barnes, S.W.: Observations on blood of cyclotron workers. *Phys. Rev.* 75 (1949), 1765.; *Science.* 113 (1951), 32.
 - 12) Suter, G.M.: Response of hematopoietic system to X-rays. USAEC. Document-MDDC-824, 1947.
 - 13) Fliedner, T.M., Andrews, G., Cronkit, E.P., and Bond, V.P.: Early and late cytological effects of whole body irradiation on human marrow. *Blood.* 23 (1964), 471—487.
 - 14) Cronkite, E.P., and Bond, V.P.: Radiation injury in man: Its chemical and biological basis, pathogenesis and therapy. Charles C Thomas, Publisher, Springfield 111. 1960.
 - 15) Gerstner, H.B.: Acute clinical effects of penetrating nuclear radiation. *J.A.M.A.* 168 (1958), 381—388.
 - 16) Goodman, J.W., Smith, L.H.: Erythrocyte life span in normal mice and in radiation bone marrow chimera. *Am. J. Physiol.* 200 (1961), 764—770.
 - 17) Hulse, E.V.: Lymphocyte depletion of blood and bone marrow of irradiated rat: quantitative study. *Brit. J. Haemat.* 5 (1959), 278—283.
 - 18) Hulse, E.V.: Depletion of myelopoietic cells of irradiated rat. *Brit. J. Haemat.* 5 (1959), 369—378.
 - 19) Dienstbier, Z., Pospisil, J., and Arient, M.: Post-irradiation lymphocyte reaction. *Int. J. Radiat. Biol.* 4 (1962), 333—342.
 - 20) Fliedner, T.M., Bond, V.P. and Cronkite, E.P.: Structural Cytological and radiographic(^3H -thymidine) changes in the bone marrow following total body irradiation. *Am. J. Pathol.* 38 (1961), 599—623.